

外国につながる児童にとって難しい語をいかに説明するかー教室ですぐに使えるレファレンスの開発ー

中石ゆうこ（県立広島大学 総合教育センター 助教）

研究の背景

日本語を母語としない児童（以下、外国につながる児童）の数は増加の一途をたどっている。外国につながる児童への語彙指導では、それぞれの児童が小学生向けの国語辞書を一斉に引き、それを児童に黙読させることで、難しい語の意味を確認する方法が取られる。しかし、外国につながる児童の中には、その辞書の説明を読んでも意味が分からず、説明に用いられる別の語について追加で解説が必要になることも多い。これ以外の指導方法としては、日本語以外の言語が優位である児童に対しては、対訳辞書を用いることもあるだろう。しかし、「利用」と「使用」について、それぞれ辞書を引いたものの、どちらも“use”という訳が載っているというように、辞書では結局、語の本質的な意味を理解することができず、その結果、実際に作文などで正しく使用する段階に至らない様子が、助成対象研究者の観察した授業でも見られた。

研究の目的と方法

本研究は、外国につながる児童にとって分かりやすい説明とはどんなものなのかを明らかにし、日本語指導においてより使用しやすい用語集（レファレンス）を国語辞書、対訳辞書以外の手立てとして、提供することを目指し、「やさしい日本語辞典」を開発する。外国につながる児童にとって分かりやすい説明を明らかにするために、日本語教師によって作成された「やさしい日本語」の説明と、小学生向けの国語辞書の説明のいずれかを児童に対してランダムに提示し、語の理解を測る多肢選択課題を用いた調査を実施した。

調査の結果

「やさしい日本語」の説明と、国語辞書の説明による問題（30問）の正答率を比較すると、「やさしい日本語」の説明の方が10%以上正答率が高かったのが11問、国語辞書の説明の方が10%以上正答率が高かったのが12問、両者の差が10%未満だったのが7問あった。この結果から、必ずしも「やさしい日本語」の説明の方が、外国につながる児童にとって分かりやすいというわけではないことが分かる。

国語辞書の説明より正答率が低かった「やさしい日本語」の説明には、①「何か」、「多くの人」のような抽象的な語を用いている、②鍵括弧のセリフが最初に来ているという傾向があった。例えば、①「何かと何かを一緒（＝一つのもの）にすること」（「合わせる」：正答率「やさしい日本語」76.5%、国語辞書100%）、②「『そうです』という意味で、頭を前後に動かします。」（「うなづく」：正答率「やさしい日本語」75.0%、国語辞書88.2%）である。「やさしい日本語」を外国につながる児童に対して使用する場合、書き方によっては理解がかえって難しくなる場合があることが分かる。

また、外国につながる児童への聞き取り調査では、「やさしい日本語」が好まれる場合もあるが、国語辞書の説明が好まれる場合もあることが分かった。ただし、分かりやすい説明がどちらかは選べるが、その理由を答えるのは難しい児童が多かった。一部から得た具体的コメントとして、辞書の記述では「ぴったり」、「非常に」、「一帯」などの語が難しいという指摘があった。「やさしい日本語」の記述は説明がくどい、簡略化しすぎて正しい意味をカバーしておらず、分かりにくいという指摘もあった。本研究を通して、「やさしい日本語」を好む児童と国語辞書の説明を好む児童がいることが示唆された。

本研究の結果から、日本語支援の場で一律に「やさしい日本語」、あるいは国語辞書の語釈を用いるのではなく、児童が分かりやすいと思う方を選べるように補助教材を用意することが必要だと言える。

成果物

明らかになった分かりやすい説明のしかたを取り入れて、語の説明をした「やさしい日本語辞典」を作成した。それとは別に、算数科、国語科を中心にした教科学習に関する語およそ100語について、実際に見られたつまづきを掲載した別冊子「つまづき事例集」も作成した。この事例集には、日本語教師（助成対象研究者）が日本語授業において配慮すべき事項も掲載した。

レファレンス、つまづき事例集の二種類の資料を日本語教育関係者、小学校教員、自治体の日本語教育担当者に郵送することで、一般公開した。今後、さらに多くの人に配付することで、多くの外国につながる児童生徒が無料で手に入れ、個別に利用することができるようになるだろう。波及効果として、開発されたレファレンス、つまづき事例集は、学習につまづいた日本語人児童、ろう児の日本語教育の指導にも活用されることが期待できる。対象を外国につながる児童から広げて公開していくことで、より多くの学習を支援することができるだろう。